冴えない大学生の、小さな喜び

新参

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冴えない大学生の、小さな喜び

【Ｎコード】
Ｎ８５６３Ｚ

【作者名】
新参

【あらすじ】
たぶん世間からはオタクと称されるであろう簑島。クリスマスをどうにか乗り越え、今日は大みそか。そんな日にも開館している不思議な図書館ではさんざんな目に。彼に救いの手は伸びるのだろうか。

最近私語をする人が増えています。
――――――ホントですよね。
見つけ次第、厳重に注意いたします。
――――――ホントお願いしますよ。

僕は張り紙と会話をする。

今、僕の対面の個人ブースにはまつ毛バサバサ女と、髪の毛モリモリ男がいる。

ここ図書館だけど？
というか、そこ個人ブースだけど？
君たちなんでそんなに堂々とおしゃべりできるのかなぁ？
だいたい君たちが行くのって、「札幌駅周辺」とか「大通」とか「狸小路」、あるいは「すすきの」とかじゃないの？

僕の楽園を荒らさないでくれ。
というか図書館員、お前ら見て見ぬふりをするな！！

完全に図書館の規約から逸脱してるだろ、こいつら。

ほらほら、蛇のように腕を絡め始めましたよ。
ホント周りの目を気にしてくれよ。

おっ、図書館員が近づいてきたぞ。
まさに「おばさん」という類に入る人物だ。
威圧感たっぷりだぞ。
このバカップルどもに制裁を…。

「あの、すみません。先ほどからキョロキョロされているようですが、何かお探しでしたか？ほかの閲覧者の方から我々の方に連絡があったもので…。」

「えっ、いや…」

え？

え・・・？

注意されたの僕ですかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？

違うでしょう、僕じゃないでしょう、声をかける相手は！！

「もし何か御用があれば、私たち図書館員の方に声をかけてくださいね。対応いたしますので」

「は…はい」

「はい」しか言えねぇ、おれめちゃくちゃかっこ悪ぅぅぅぅっぅぅぅ！！

ってか、何でだよ？

というか、俺には敵しかいないのか？

奥の方でほくそ笑んでいる、あの馬鹿どもが憎い。

あいつらか…。

心の声は誰にも届かない。

大学４回生を迎える簑島正二はその理不尽な図書館を出た。

「今年も同じようなお正月を迎えるんですよ」

独り言にしては少し大きな声で簑島はつぶやいた。

大学４年間、というか今までの人生、彼女という存在を味わった

ことがない。
今では自分を裏切らない2次元のものにしか興味がない。
先日リア充どもの会、通称「クリスマス」が過ぎ去った。

簑島は家に引きこもり、何とかリア充の爆風から逃れた。

「大みそかにも空いている私の街の図書館。なのに荒らされつつある私の楽園（パラダイス）」

とりあえず、漫画喫茶で5時間ほど時間をつぶした。
年越しくらい、自分の家で越そう。
そうして、簑島は帰路に着いた

簑島は帰り道の途中、緑色に「7」の文字が大きく目立つコンビニに立ち寄った。

「こんな日にはおでんが一番なんですよ」
またも誰に聞かせるでもなく、一人つぶやく。

「いらっしゃいませ」

店の奥、飲み物が置いてある辺りから声が聞こえた。
店員は品出しをしているのか、レジの方には誰もいなかった。

「――――むむっ、この声は…『あーたん』に似ている！！　もしかしたら『まりタン』にも似ているかも」
簑島レーダーが発動した。アニメのヒロインと思しき名前を挙げ、逡巡した。
「顔は見ちゃだめだ。きっと幻滅するに決まっている。」
簑島は下を向きながらレジへと進んだ。
「すみません、おでんをいただきたいのですが、どなたかレジへと来てはいただけませんか？」
「はーい、ただいま参ります」
アニメ声の店員は背後から近づき、ついに簑島の目の前に現れた。
見ちゃいけん、見ちゃいけん。
簑島は心の中で呪文のように唱える。
「お待たせいたしました。ご注文いかがなさいますか？」
「大根、卵、ソーセージロール、それと牛筋を…」
「かしこまりました」
アニメ声の店員は手際よくそれら注文したものを容器の中に入れていく。
時折見える、透き通った白い手に誘惑されつつも、簑島は下を向き続けた。

「はい、それでは合計４２０円です。」

「それではこれで…」

しまったぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

気付いた時にはもう遅かった。

お金を渡そうとした際、簑島は顔を挙げてしまった。

そして簑島の目に飛び込んできたのは、色白でポニーテール、背が低めで、細身の大学生とも、高校生ともとれるような可憐な女性だった。

簑島は硬直した。

「はい、それでは１０００円お預かりいたします。」

チャリーンと言うレジの音とともにその女性はお釣りを中から取り出し、簑島に手渡す。

簑島は口を開けたままそれを受け取る。

そのときに少し手が触れて、それだけで簑島は発狂して昇天しそうだった。

簑島は急いで店を出た。

遠くで「ありがとうございました」という、何とも可愛らしい声が聞こえ、振り返りたかったが、簑島は我慢して歩き続けた。

家に着くころ簑島はまたつぶやく。

「僕としたことが、３次元に化(ば)かされるなんて…」

しかし簑島の頭から、その声と笑顔は離れない。

あと一回…あと一回くらいなら…。

簑島はおおおおおおと唸った。

そして夜の空に叫んだのだ。

時計の針は１２時を回った。

「ハッピーーーーニューーーーーイヤーーーーーーーー」

彼の幸せは響き渡った…かもしれない。

（後書き）

勢いで書ききりました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8563z/

冴えない大学生の、小さな喜び

2011年12月26日23時47分発行